

監修の序

管理栄養士の専門領域となる保健・医療・福祉分野は、近年、著しく進歩している。一方、対象者の健康状態、病態、さらに生活や環境は複雑で多様化し、それに対応する管理栄養士に求められる知識や技術は、今までに経験したことがないほど高度になりつつある。臨床栄養管理では、栄養状態の評価、判定、栄養ケア計画、栄養教育や食事・栄養補給の実施、さらにモニタリングや再介入の方法を習得することは必須である。それと同時に、傷病者が個々にもつ遺伝的素因、病態、生活、人生観や価値観などを総合的に評価、判定する能力も必要になる。

管理栄養士の役割と業務は、^{ちゅうぼう}厨房や事務所での献立作成、調理業務から、地域におけるハイリスク者、ベッドサイドでの傷病者、高齢者、障害者などの栄養状態の維持、改善、回復を目的とした臨床栄養管理へと変化しつつある。このような業務の変化が、傷病者のQOLの上昇、外科療法や薬物療法の効果の向上、入院日数の短縮、医療費の抑制に貢献する。さらに近年、管理栄養士を特定集中治療室（ICU）に配置することにより、絶食から経腸・経口栄養を開始する期間が短縮され、輸液使用料、抗菌薬使用料が減少することが明らかになってきた。管理栄養士には、さらに高度な臨床の知識や技術を習得することが求められている。

ところで、医療関係者の職業倫理に、“not tell a lie”という項目がある。嘘をつかないということであるが、この意味は単に正直であるということだけではない。科学的に嘘をつかない、つまり科学的根拠に基づいて業務を遂行する意味が含まれている。科学は日々進歩し、変化することに価値があるために、根拠に基づいて仕事をするためには常に学び続ける必要があり、このため臨床栄養における臨地実習には、重要な意味がある。

例えば、最近の進歩には経腸・静脈栄養補給法の適正な選択、特別用途食品の活用、^{そしやくえんげ}咀嚼嚥下困難者への特殊食品の利用や栄養指導、臨床栄養疫学の活用、栄養素に対する内分泌系・神経系の調整機能の進歩など、一人の患者を目の前にして考慮すべき事項は、多様で複雑になりつつある。

未来の優秀な管理栄養士を育てるためには、臨床現場と教育機関が連携、協働して臨地実習を進めることが重要であり、この本がそのために活用されることを願っている。

2022年10月

神奈川県立保健福祉大学学長
中村丁次